

古宮遺跡の調査

—第119-3次

この調査は明日香村豊浦における家屋増築に伴う調査である。調査地は明治年間に金銅製四環壺がその周辺から掘り出されたとされる古宮土壇(本誌I-46頁参照)の東南方である。古宮土壇周辺は推古天皇の小墾田宮推定地の一つであり、1970・1973年に実施した、当研究所の発掘調査によって、7世紀前半代の石組池や石組溝、7世紀後半代の掘立柱建物、8世紀前半の建物や土坑、溝などを確認した。宮跡比定には至らないものの、当該期の遺跡が重層的に広がっていることが明らかになっている(『藤原概報1・4』、『藤原報告I』)。

今回の調査地は先の調査区に東接し、7世紀初頭の石組大溝SD50や7世紀後半代の東西溝SD20が延びていると予想し、南北8m、東西2mの調査区を設定した。なお、東西溝SD20の東延長部については、南端にある用水路に一部かかるために断念した。

調査 調査地の層序は上から、耕土、床土、褐色土、灰褐色砂土、暗灰色砂土、明灰色砂、灰褐色砂礫であり、現水田面下約40cmの灰褐色砂土上面で遺構を検出した。暗灰色砂土以下には古墳時代の土器が含まれ、灰褐色パラス、灰褐色砂土はそれ以降の整地土にあたる。検出した遺構には石組大溝SD50のほか、石列1条、柱穴2個、土坑5基およびSD50以南のパラス敷がある。

石組大溝SD50には改修が認められる。当初(SD50A)は南北両側石ともに0.3~0.5m大の川原石を1段~2段積み重ねて、幅1.2m、深さ0.4mにつくる。SD50Bは北側石の南、溝内の堆積砂層の上に小形の川原石を3段ほど積み上げて北側石とし、南側は当初の護岸を抜取り、内側に据え直して溝幅0.65m、深さ0.3mとしている。SD50Bには灰褐色砂が堆積し、上部を黄色粘土小粒が混じった暗褐色土で埋め立てている。1970年の第1次調査で確認した上層及び埋土がSD50Bにあたり、中層、下層がSD50Aにあたると思われる。SD50A及びBからは飛鳥Iまでの土器が出土し、SD50Bの堆積層からは赤褐色の磚が出土した。SD50Aの北側石の北0.6mに平行する石列SX4047はSD50のA、Bいずれに属すかは明らかでない。なお、大溝以南のパラス敷SX4046はSD50Aの段階には存在したと思われる。

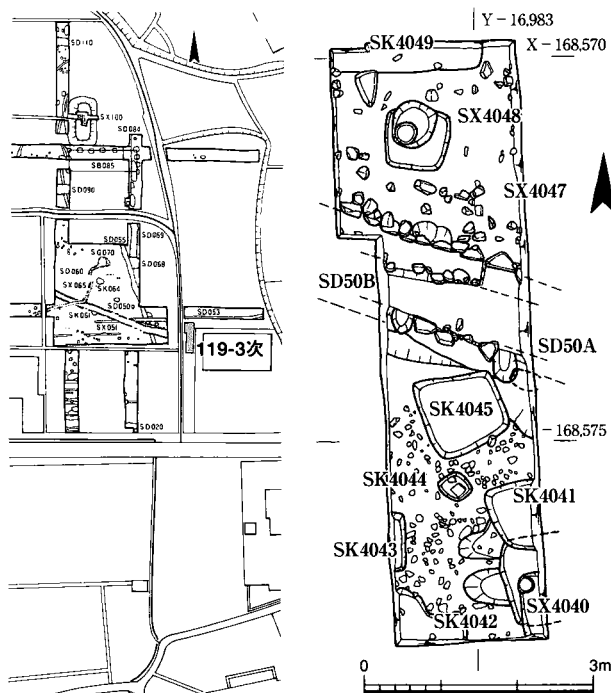


図104 第119-3次調査位置図・遺構図 1:2000 1:100

柱穴SX4040・4048は、柱掘形が一辺0.8~1.2mの方形で、深さ0.5m。いずれも上部が楕円形で、下部が直径0.2m程の円柱形に黄色粘土が詰まった柱抜取穴がある。両者は直線距離で6.1m離れ、深さと抜取穴埋土の様子が類似することから一つの建物になる可能性があるが、調査区内では他に柱穴が検出されず、棟の方向や規模は不明である。掘形、抜取穴ともに少量の土器片が出土したが、時期が判明するものは5・6世紀~飛鳥Iに属す。直接に重複はしないがパラス敷を壊しており、SD50よりは新しいであろう。なお、柱抜取穴の特徴は、石神遺跡のA期(7世紀前半から中頃)や飛鳥板蓋宮伝承地上層遺構(7世紀後半)のそれと類似しており、柱穴が8世紀以降に降ることはいないであろう。

土坑は、5世紀代の土器が多く含まれるSK4049と平瓦片が含まれた小土坑SK4044を除いて、埋土に黄色粘土の小粒を含み、飛鳥Iの土器が最新であるが、柱穴SX4040より新しいものと古いものがある。

まとめ ①小規模調査ながらSD50が東に延びていることと、両側石とも改修されていることが確認できた。SD50B出土磚は、第1次調査では石組小溝SD70埋土からも出土しており、両者の埋没が同時期である可能性が考えられる。②大溝埋没後と思われる建物が確認された。従来、トレンチ調査であったこともあって充分には解明されていない建物遺構の広がりや所属時期の追究は、古宮遺跡の性格を考える上で重要である。土壇周辺を含めた再発掘による解明が望まれる。(西口壽生)